

ドラマティック日本史 第4弾

「崇徳上皇 VS 後白河天皇」 ～院政時代の最大の対立～

講 師：山村 純也 先生

日 時：11 月 17 日（月）10：00～11：40

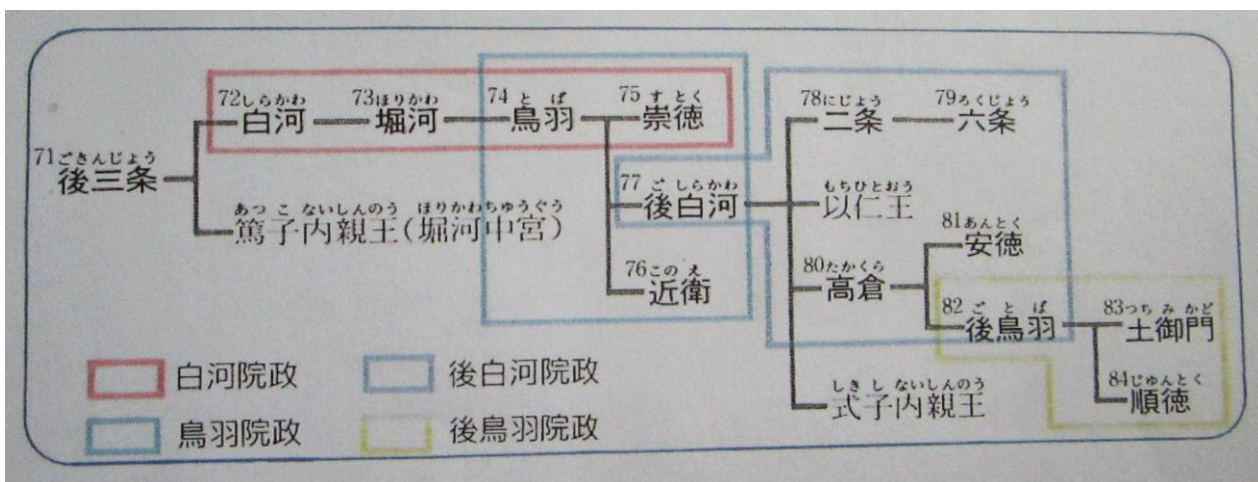
■摂関政治から院政時代へ

◆ 摂関時代が貴族没落と武士の台頭を招く

平安後期に訪れた摂関時代。この世の春を謳歌した藤原道長・頼通親子でしたが、平等院建立に見られる様に、現実の世界は既に末法の時代に突入し、人々は生活に困窮し、洛中でも疫病や飢えに苦しむ人が続出するような不穏な時代となっていた。その中で台頭したのが源氏であり平氏であった。

◆院政時代が平安時代の終わりを演出

白河上皇以降、天皇は「院政」というしくみによって自由に権力を得ていきます。この院政時代が招いたもの、それは「武家勢力の台頭」だった。院政の最も大きな利益を享受した白河上皇は、武家の力を用いて膨大な権力と富を駐中させて自らの時代を謳歌し、鳥羽女医浮く時代には、武家勢力を積極的に取り込むことになる。



■崇徳上皇 VS 後白河天皇

◆保元の乱への序章①源平の明暗②崇徳天皇の即位と退位③近衛天皇の退位と崩御④鳥羽天皇崩御で兄弟対決へ

■兄弟対決 保元の乱

◆ 撮関家の兄弟争いも同時に勃発

◆崇徳上皇側の動き・後白河上皇側の動き◆敗者のヒーロー・源為朝

■兄弟対決（保元の乱）のその後

◆ 4年後には平治の乱が勃発

◆対象的な兄弟の晩年

＜崇徳上皇＞：讃岐に流された後は、仏教に傾倒して写経を熱心に行い、都へ納めたいと願い出たが「呪いが込められている」と拒否され、自らの舌をかみ切って流れ出た血で、「日本国の大魔縁となり、皇を取って民とし民を皇となさん」「この経を魔道に回向す」と書き記し頓死した。遺骸を火葬にした際、その煙は逆風にも関わらず、都の方角にたなびいたと伝えられる。以降、次々に都を襲った悲劇はすべて崇徳上皇の怨霊と考えられた。

明治になって白峰神宮が創建されて怨霊は収まったともされている。

